広報
# 海と共に
令和７年度 秋・冬
JF みやぎ 宮城県漁業協同組合
〒986-0032 宮城県石巻市開成１番27
TEL.0225-21-5740 FAX.0225-93-5160

## 持続的な漁業経営推進 生活向上へ役職員一丸

### 年頭あいさつ

代表理事組合長
寺沢春彦

令和８年の新春を迎え、皆さまに謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

昨年を振り返りますと、本県において主要な養殖漁業のうち、カキについてはノロウイルスによる加熱用出荷が長期間にわたったことによる需要の低迷、ホタテについては高水温による種苗の生育不良やへい死が依然として多く見られる状況でありました。

一方で、ギンザケについては養殖開始が一ヶ月ほど遅れるも、育成期間中は養殖に適した海水温が続いたこと、乾ノリやワカメなどの海藻類については、全国的な供給不足もあり高値での取引が続いたことにより、堅調に推移いたしました。

また、県内水産物の水揚げにおいては、長年漁船漁業の不漁が続いておりましたが、黒潮の大蛇行が８年ぶりに解消され海流に変化が見られたことで、一部魚種においては従前に比べ大幅な漁獲量の増加が見られ、また、新たに獲れ始めた魚種においてはブランド化が期待されるなど、先行きが不透明ながら明るい兆しも見えております。

漁業者をはじめとした水産関係者は、かねてからの風評被害に苦慮する中、後継者や従業員の確保・育成も今後の大きな課題として残されておりますが、当組合では持続的な漁業経営を実現するための環境づくりとして、国の助成事業を活用した流通対策、新飼料の開発や新品種の試験養殖、首都圏に向けた県産水産物のPRなど、現状の問題点に即した対策や施策を講じてまいりました。

今後につきましても、協同の精神を基盤として、組合員の漁業活動を支え、より豊かな暮らしの実現を目指すため、引き続き系統団体や行政機関との連携をより強固にしつつ、「組合員の生活向上、漁村地域の永続」と「消費者の皆さまに安全・安心な水産物の提供」、そして「組合経営の安定」を使命とし、役職員一丸となり鋭意事業活動に取り組んでいきますので、皆さまにはご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、新たな一年が組合員の皆さまにとって災害のない平穏な年になることをご祈念申し上げ、新年のあいさつとさせていただきます。

## 長年の功績たたえ 4氏に全漁連表彰

阿部敏雄氏

石森裕治氏

阿部誠二氏

須田政吉氏

全漁連の2025年度漁協系統功労者表彰が昨年11月19日に東京都内で開かれ、当組合から4氏が栄誉に輝いた。

漁協系統運動の推進・発展への功績をたたえる漁協運動功労者に、副組合長理事で石巻市東部支所運営委員長の石森裕治氏（68、石巻総合支所運営委員長）が選ばれた。

漁業や漁協事業の発展に貢献した漁業振興功績者に、理事で女川町支所運営委員長の阿部敏雄氏（72、元本所ぎんざけ部会長）と、石巻地区支所運営委員長の須田政吉氏（72、元本所かき部会長）、全国漁青連会長の阿部誠二氏（42、谷川支所）が選ばれた。

## Fish−1グランプリ 当組合員グループ連覇

### 戸倉 SeaBoys

当組合志津川支所の若手漁業者グループ「戸倉SeaBoys（シーボーイズ）」が、地域の特産水産物を使った全国料理コンテスト「第11回Fish−1グランプリ」（全漁連など主催、昨年11月30日開催）で初の２年連続グランプリを獲得した。このほどメンバー４人が本所を訪れ栄冠を報告、寺沢組合長らは全国での活躍をたたえ、「本県水産物の評価を高めていただき大変ありがたい」と感謝した。

左から寺沢組合長、後藤新太郎さん、佐藤将人さん、後藤伸弥さん、三浦将平さん、平塚専務理事

グランプリに輝いた「漁師が丸ごと包んだ！海の幸ごちそうタコス」＝**写真中**（同グループ提供）＝は、メンバーが生産・漁獲した魚介を使用。酒蒸しにしたカキ、ペペロンチーノ風に味付けたワカメ、みやぎサーモンの生ハムなどをトルティーヤで包み、気軽に魚食を楽める一品にした。

レシピを考案した佐藤将人さんは、「宮城の水産物のおいしさを多くの人に発信できうれしい」と笑顔。リーダーの後藤伸弥さんは「結成から８年目を迎えるが、これまで支えてくれた多くの方々と一緒に獲得した栄冠」と感謝を述べた。

また、同イベント会場では当組合などによる「三陸わかめ共販推進委員会」もブース出展＝**同下**。わかめスープを販売するなど三陸産をPRした。

## 皇室献上の栄誉に

### 菊地幹彦氏と手代木千年氏

優賞の菊地幹彦氏（右）と準優賞・手代木千年氏の代理で表彰を受けた息子の泰伸さん

皇室に献上される乾のり

鹽竈神社奉献「第78回乾海苔品評会」の表彰式が１月11日に同神社で開かれ、最高賞の優賞（県知事賞）に輝いた菊地幹彦氏（63）＝仙南支所（亘理）＝と準優賞（塩竈市長賞）の手代木千年氏（76）＝鳴瀬支所＝に賞状とカップなどを贈った。優、準優賞の乾のりは皇室に献上される。

優賞の栄誉に菊地氏は「会社を組織し生産しているので仲間のおかげ、代表して私がいただいたようなもの」と感謝。「みんなで生産したものが評価を受け大変うれしい」と笑顔を見せた。

準優賞の手代木氏もグループでの生産に取り組み、表彰式に代理出席した子息の泰伸さんによると受賞を喜んでいるという。父の栄誉に泰伸さんは「ノリの勉強を重ねてきた父の知識を教わり、私たちも生産に励みたい」と敬意を示した。

品評会は6日に同神社で行われ、出品90点の中から色つや、香りなど吟味。優、準優賞を含め58点を入賞とした。審査委員長を務めた宮城県仙台地方振興事務所水産漁港部の鈴木永二部長は、「出品されたいずれも素晴らしい品質で、確かな技術力とたゆまぬ努力に改めて敬意を表する」と生産者をたたえた。

## 「人の運送」に注意を 法改正受け説明会開催

北海道・知床半島沖での遊覧船沈没事故を受けた海上運送法等の一部を改正する法律により、２０２５年４月から人の運送をする不定期航路事業は従来の届出制から登録制の「一般不定期航路事業」に変更された。有償・無償に関わらず他者の要請に応じ不定期に人を運送する事業は手続きが必要となる。

これを受け当組合では昨年12月23日、国土交通省東北運輸局海事振興部の担当者から、各支所の支所長ら約60人が制度内容など説明を受けた＝**写真**。漁業船舶においても研究機関の視察や調査、報道の取材要請などさまざまな状況が想定されるが、本所指導部では「違反と判断され思わぬ処分につながる可能性もあるので、他者を乗せる運航は支所や関係機関に確認した上で行ってほしい」と呼びかけている。

県内の問い合わせ窓口は次の通り。

▽東北運輸局海事振興部海事産業課（電話０２２・７９１・７５１２）▽東北運輸局石巻海事事務所（０２２５・９５・１２２８）▽東北運輸局気仙沼海事事務所（０２２６・２２・６９２８）。

# 海の子の思い作文に力作そろい27人表彰

## 女性連

当組合女性部連絡協議会（三浦弘子会長）は、主催する第41回「みやぎの海の子」作文の表彰式を1月6日に石巻市内で開いた。応募113点の中から、入賞した小中学生27人に賞状と記念の盾を贈呈。三浦会長は「懸命に働く家族への感謝や漁業の手伝いを通し自分の将来を考える内容、環境を守りたい思いなど、どれも素晴らしい作品だった」と講評した。

県知事賞に輝いた児童生徒３人

式では第一部（小学1～3年）、第二部（同4～6年）、第三部（中学生）で最高賞の県知事賞に輝いた3人が作文を朗読。南三陸町立戸倉小学校1年の松岡勇誠さんは、朝早く漁に向かう父の大変さに心を寄せ、食卓に並ぶ海の恵みに感謝。「僕も大きくなったら、お父さんみたいな漁師になります」と元気に発表した。

気仙沼市立唐桑小学校6年の後藤結晴さんは、遠洋マグロ漁船の船頭になる夢を抱き、その理由を魅力豊かにつづった。

石巻市立牡鹿中学校3年の阿部圓（つぶら）さんは、新魚種のタチウオ漁に取り組む父の姿に尊敬の念を示し、「食べるためのライスワークを、人生を懸けられるライフワークに」と話す父から得た学びと将来への思いを丁寧にまとめた。

入賞作品は冊子にまとめられ、当組合各支所などに配布される。

**第41回「みやぎの海の子」作文入賞者**

| 部 | 賞 | 題名 | 氏名 | 学校名 | 学年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一部 | 宮城県知事賞 | おおきくなったら | 松岡　勇誠 | 南三陸町立戸倉小学校 | 1年 |
| | 宮城県漁業協同組合長賞 | 海に親しむ会で学んだこと | 岸　幸之心 | 南三陸町立名足小学校 | 3年 |
| | 宮城県漁業共済組合長賞 | パパはりょうしさん | 後藤　鈴 | 南三陸町立戸倉小学校 | 1年 |
| | 宮城県ＪＦ共済推進本部会長賞 | パパのうみのおしごと | 鈴木　千賀 | 気仙沼市立松岩小学校 | 2年 |
| | 日本漁船保険組合宮城県支所運営委員長賞 | はじめてのふなづり | 菅原　颯太 | 南三陸町立戸倉小学校 | 2年 |
| | 宮城県漁業信用基金協会理事長賞 | キャンドル作り | 三浦　世那 | 南三陸町立名足小学校 | 3年 |
| | 農林中央金庫仙台支店長賞 | だいすきなうみ | 小山　和葉 | 気仙沼市立唐桑小学校 | 1年 |
| | 宮城県マリンバンク運営委員長賞 | じいじとわたしとうみは、みんな友だち | 齋藤　凪 | 気仙沼市立面瀬小学校 | 2年 |
| | 宮城県漁協女性部連絡協議会長賞 | たいせつなうみ | 阿部　菜乃 | 南三陸町立伊里前小学校 | 2年 |
| 第二部 | 宮城県知事賞 | 目指せ船頭への道 | 後藤　結晴 | 気仙沼市立唐桑小学校 | 6年 |
| | 宮城県漁業協同組合長賞 | 海の環境を守るためにできること | 松本　彩杏 | 気仙沼市立松岩小学校 | 5年 |
| | 宮城県漁業共済組合長賞 | わかめで美しく | 横山　結愛 | 石巻市立大原小学校 | 5年 |
| | 宮城県ＪＦ共済推進本部会長賞 | 今私が海のためにできること | 須藤　絢友 | 気仙沼市立松岩小学校 | 5年 |
| | 日本漁船保険組合宮城県支所運営委員長賞 | わたしのお父さん | 渡邉　愛依 | 石巻市立寄磯小学校 | 4年 |
| | 宮城県漁業信用基金協会理事長賞 | 私のおじさんの仕事 | 中田　悠月 | 気仙沼市立松岩小学校 | 5年 |
| | 農林中央金庫仙台支店長賞 | 海洋汚染の解決へ向けて | 阿部　壮馬 | 石巻市立大原小学校 | 5年 |
| | 宮城県マリンバンク運営委員長賞 | ウニとアワビを守れ | 及川　凰雅 | 南三陸町立伊里前小学校 | 6年 |
| | 宮城県漁協女性部連絡協議会長賞 | 大切な海のためにできること | 矢竹　うた | 女川町立女川小学校 | 4年 |
| 第三部 | 宮城県知事賞 | ライスワークをライフワークに | 阿部　圓 | 石巻市立牡鹿中学校 | 3年 |
| | 宮城県漁業協同組合長賞 | 私の気持ちを伝えたい | 渡邉ひらり | 石巻市立牡鹿中学校 | 3年 |
| | 宮城県漁業共済組合長賞 | 海の仕事を受け継ぐということ | 星　まつり | 南三陸町立志津川中学校 | 1年 |
| | 宮城県ＪＦ共済推進本部会長賞 | 知る私だからできること | 渡邉　羽海 | 石巻市立牡鹿中学校 | 2年 |
| | 日本漁船保険組合宮城県支所運営委員長賞 | これからの海 | 須藤　柚奈 | 南三陸町立志津川中学校 | 3年 |
| | 宮城県漁業信用基金協会理事長賞 | 海の未来を守るために | 千葉　百花 | 南三陸町立志津川中学校 | 3年 |
| | 農林中央金庫仙台支店長賞 | 私の町の鰹節屋さん | 加藤　姫奈 | 気仙沼市立唐桑中学校 | 2年 |
| | 宮城県マリンバンク運営委員長賞 | 漁業の大変さと父の仕事 | 渡辺　隆介 | 石巻市立牡鹿中学校 | 3年 |
| | 宮城県漁協女性部連絡協議会長賞 | 私たちの未来の海 | 名和　蒔緒 | 石巻市立牡鹿中学校 | 2年 |

# 小学校で出前授業 漁業の魅力伝える

## 青年部

子どもたちに漁業への関心を高めてもらおうと、当組合青年部の青山喜信委員（十三浜支所）と斎藤修平委員（寄磯支所）、阿部誠二顧問（谷川支所）が昨年11月25日、石巻市の大原小学校で出前授業を行った。

マダコに触れ歓声を上げる児童ら

青山さんと斎藤さんが中心となり、児童11人に漁船漁業の主な漁法や仕事の魅力などを紹介。タコかご漁の説明では実際にマダコを触らせ、「初めて触る」「ニュルニュルする」と大歓声。ロープワーク体験も行い、漁業者ならではの授業に児童らは終始笑顔だった。

同校は牡鹿半島の大原浜にあり、漁家の子どもが多い。家族の仕事への関心も深まったようで、児童らは「覚えたロープ結びをお父さんに見せたい」「いろんな漁があると知り勉強になった」とうれしそうに話した。

青山さんは「家族と漁業について話し、将来を考える一つのきっかけになれば」と意義を強調。斎藤さんは「自然と向き合う仕事の魅力が少しでも伝われば」と未来につながる交流を喜んだ。青年部は今後も同様の活動に取り組んでいく方針。

# こども食堂に食品寄贈

## 焼のり、みやぎサーモンも

## こんわ会

当組合とＪＡ宮城中央会、宮城県生活協同組合連合会、宮城県森林協同組合連合会でつくる「宮城県協同組合こんわ会」は、物価高で運営が圧迫されている県内のこども食堂を支援しようと、みやぎこども食堂ネットワークを通じ52団体へ食料品を贈った。

昨年12月11日に仙台市内で贈呈式が行われた＝**写真**。県産米や野菜、菓子のほか、当組合からは焼きのり10枚入り600袋を寄贈。出席した本所指導部の土方規生部長は「食を支える団体として、子どもたちの笑顔のために少しでも貢献できればうれしい」と話す。

また、2025年は国際協同組合年ということもあり、東日本信用漁業協同組合連合会宮城統括支店も支援に賛同。みやぎサーモンのロイン2枚入り29箱を寄贈した。井上英明統括支店長は「こども食堂は地域をつなぐ場所。宮城のギンザケを食べてもらい、子どもたちの笑顔が増えるきっかけになれば」と思いを込めた。

寄贈を受けたNPO法人「ふうどばんく東北AGAIN（あがいん）」（富谷市）の富樫花奈副代表によると、「食材の値上がりが各地のこども食堂の運営を圧迫しており、特に水産物は提供したくても手に入りにくい食材」という。「焼きのりやサーモンは子どもたちが喜ぶ食材。気候変動で漁業も大変な中、支援いただき大変ありがたい」と感謝した。

# 海難防ぎ安全操業 高校生ら呼びかけ

## 宮城水産高

事故を未然に防ぎ安全な漁業を行ってほしいと、宮城県水産高等学校（小山英明校長）の生徒12人が昨年10月31日、石巻市の荻浜漁港で行われた海難防止啓発活動に参加した＝**写真**。

当組合による宮城県漁船海難防止協議会と宮城県海上保安部、宮城県水産林政部、日本漁船保険組合宮城県支所の合同啓発活動の一環で、高校生の参加は初。生徒らは海上保安部職員から海難発生状況や啓発内容について説明を受けた後、カキ生産者らに対し▽寒さが増す冬季の転落事故は命に関わる危険性があること▽ライフジャケットを正しく着用することで生存率が上がること▽万が一に備え縄ばしご装備の必要性▽ローラーへの巻き込まれ事故の防止――などパネルを見せながら注意喚起。「慣れているから大丈夫と思わないで」と引き続きの安全作業を呼びかけた。

石巻地区支所荻浜支部長の渡辺悟さんは「孫のような若者に気にかけてもらい、改めて命を大切に仕事をしなければと思った」と高校生らの活動に感謝。同校3年生の三川旬伍さんは「自分も将来は漁業者になりたいので、海で安心して働けるように、と願いながら呼びかけた」と振り返った。

# 協同組合論 ㊲

北海学園大学
経済学部教授
濱田武士

# 過去に学び未来へ結束

アキサケがさっぱり来遊しなくなりました。ふ化放流のための親魚も確保できなくなりました。令和7年は少し好転しましたが、サンマ、スルメイカも不漁が続いています。一方で、宮城県では見慣れないサワラ、タチウオ、フグ類、イセエビがよく獲れるようになり、マイワシ、ブリも好調です。国際規制で厳しくなったクロマグロもよく来遊し、定置網ではすぐに割当を超えることから、放流しなくてはならず、もはや害魚扱いです。一方の養殖業は、ワカメ、コンブ、ノリ、ホタテガイ、カキ、いずれも生産状況は極めて不安定になっています。地球温暖化についてよく話題になりますが、海の高水温化が影響しているのでしょうか。

私は海洋学の専門家ではないので、このような状況になった理由については解説できません。ただ、三陸の漁業や養殖業の歴史を振り返れば、今の状況が特別ではないとも思っております。実は定置網では60年以上前、アキサケが獲れず、クロマグロそしてブリが豊漁だったことがありました。今の状況とかなり似ています。養殖業においても豊作時期があれば不作時期がありました。どうやら自然現象として獲れる魚が交代する、豊作・不作が繰り返されるという周期性がありそうです。ただ、長期的な変化として観測されている温暖化という現象については放置しておくわけにはいきません。

では、まず未来をどう見通せば良いのでしょうか。これも歴史に学ぶ必要があります。浜の先人たちは常にどうしたら食っていけるか考え、知恵を絞ってきたということです。今ある漁業も、養殖業も、ひと世代前の先人たちが開発し、その後、改良が加えられたものであって、大昔からそのまま存在していたわけではありません。ノリ養殖、カキ養殖そしてホヤ養殖は古くからありましたが、養殖方法は大きく変わりました。昭和30年代後半からワカメ養殖が、昭和40年代後半からはコンブ養殖やホタテガイ養殖、そして昭和50年代にはギンザケ養殖が始まりました。最近では、かつてジャマモクと呼ばれ雑草扱いだったアカモクが立派な有用資源となり、養殖まで行われるようになりました。

先人たちは、今まで獲れていたものが獲れなくなれば、次に何を獲るのか、または養殖業として何を育てるのかを実践してきたのです。もちろん、こうした漁業・養殖業の進化は、漁業者が漁業者として海と共に生存するために努力してきた結果であり、その〝たくましさ〟を象徴するものです。決して簡単なことではありません。

ここで出てくるのが協同組合です。今獲れる新たな魚種を獲るにも、商品として売るためにどのような状態で出荷したら良いのかなどの準備と努力が必要です。また、新種の養殖を行うにもさまざまな情報収集と準備が必要です。そうなると漁業者一人で取り組むよりも仲間と一緒に取り組んだ方が良いです。また、行政関係者や水産試験場の研究員に協力を得た方が明らかにプラスであり、他の浜のためにも良いかと思います。

このように浜と行政が新たな取り組みをすると、組合員・役職員が漁協の中でまとまって対策を行った方が手っ取り早いです。私は、必ず周期的にやってくる不漁や不作そして別種資源の増加や新種養殖の発見などの歴史的転換点にこそ、漁協が試される、と思っています。

## 組合からのお知らせ　指導部共済課

JF共済はJFの主要事業として、海に生き、浜に生活する組合員・地域住民の「暮らしの保障」に万全を期すことを通じて、美しい海と漁業を守り、豊かに安心して暮らすことのできる魅力ある漁村・地域づくりに貢献することを目指して事業を展開しています。

今年度の共済事業については「浜の保障をJF共済で守る」ため、「浜のあんしんサポート運動」を継続展開し、漁村地域で活動するJF組合員・漁家世帯のご家族および地域住民の生活・福祉の向上を目指し、すべての組合員に寄り添い、保障を提案する活動を積極的に展開しています。

この運動では、家族構成の確認や、JF共済にご加入いただいているご契約内容の確認を行いながら、必要な保障額を一緒に確認し、一人ひとりのニーズに合った保障に関する相談にお応えすることなど、JF共済の相談機能の強化を行っており、浜の皆さまの笑顔を増やす活動として取り組んでいます。

ライフサイクルの段階によって、どのような見直しが必要か、将来を見据えたリスク回避を考えて生活保障設計を組み立てる事が重要です。

長い人生にはいくつかの段階があり、これらの変化を一般的にライフサイクルと呼んでいます。

ライフサイクルの各段階において家計の収支に変化が起こり、必要な保障も移り変わるため計画的な準備が大切です。

「浜のあんしんサポート運動」で「現在の保障は実際の生活環境と合っていますか？」「ご加入中の契約内容を覚えていらっしゃいますか？」など「生活保障設計」を一緒に確認しましょう！

水産業の維持・発展には、浜に生活する組合員と漁家世帯ご家族の安定した生活の上に成り立っています。

**「万一」「医療」「老後／介護」「住まい」「車」**

**「浜のあんしんサポート運動」で確認しましょう**

## この人この浜

### 宮戸支所　門馬太一さん（24）

# 夢を描き新たな挑戦

支所で一番若いノリ生産者。周囲の期待を受けながら、今年、新たな挑戦の年を迎える。これまでノリ養殖を行う株式会社の一員として経験を積んできたが、次漁期から自分の会社を起こし、独立する決断をした。

ノリ漁家の四代目。震災前は自営で忙しく働く家族の姿を幼少期から見てきた。「朝起きると祖父も父も海に出ていて、学校から帰るとノリを機械にかけて、ずっと仕事をしていた」。それほどの情熱を注ぐ仕事に、自然と興味が湧いた。東日本大震災が発生したのは小学校3年生の時。子どもながらに親の苦労を肌で感じたと記憶をたどる。

ノリ養殖との関わりは高校時代、ほかの生産者の下でアルバイトをしたことがきっかけ。当時、ガソリンスタンドや運送業など多くのアルバイトを経験したが、「ノリ養殖が一番面白かった」と進路を定めた。震災後、ノリ生産者が集まりグループ化が進んだ宮戸地区で、父・雅則さん（54）が役員を務める生産会社でキャリアをスタート。そこで3年ほど経験を積み、一層の研さんを積みたいと現在の会社に移った。日本人12人、外国人実習生7人が在籍、若い世代にも仕事を任せてくれる環境で、「どうすればより良いノリ作りができるか、意見を出し合いながらの仕事はとても勉強になった」と振り返る。海水温や天候など自然を相手にする難しさは多いが、狙い通りに種が着き、色つやのいいノリができた時の喜びも大きい。「その〝駆け引き〟が面白く、やりがいを感じる」と笑顔を見せる。

そして、学んだ経験を自分なりに実践したいとの思いから、会社を起す決断をした。自身が代表となって、父と一緒に挑む。家族会議を重ね、幼少期は寡黙だと思っていた父と膝を交えて話し合い、覚悟を決めた。「父に楽をさせたい思いもあった」と太一さん。「がんばる養殖復興支援事業」を活用し、必要な機材の選定から作業場の建屋の構造まで熟考し準備に奔走する。借入金はすべて太一さんの名義だ。

「品質と数にこだわりたい」と表情を引き締める。より強く質の良い生産につなげようと野外採苗にも力を入れるつもりだ。独立後、少ない人手でも生産性を高める工夫にも考えを巡らせ、秋芽網と冷凍網の配分や張り替えの最適期を探りながら「例えば漁場の一部を秋芽だけにするのも一つの方法かもしれない」とアイデアは尽きない。

若い世代の頑張りが浜を活性化させると信じ、「休むより仕事をしたい」と情熱を燃やす。宮戸支所の小野寺和浩支所長は「太一さんの独立は、次世代へ産業をつなぐ意味でも大きい」とエールを贈る。鹽竈神社の「奉献乾海苔品評会」で優賞に輝く、皇室御献上の生産者となることも目標のひとつだ。

「日本一のノリ屋になりたい」と力強く話す。生まれ育った浜に、新たな夢を描く日々が始まる。

### 志津川支所　高橋勝寛さん（30）

# 父子の背中でつなぐ海

高橋勝寛さんは荒砥漁港で一番の若手漁業者。父の勝之さんと2人、ワカメやホタテ養殖、タコかご、マダラ刺し網、メカジキの突棒漁などさまざまに家業を盛り立てる一方、週末には自船の第八勝栄丸（6・5㌧）で営む遊漁船の船長として浜ににぎわいをもたらしている。

祖父の代から続く漁家で、幼い頃から「海は楽しい遊び場」だった。浜で仕事をする祖父や父の背中を見て、いつしか自分も漁師になりたいと思うようになった。その思いを強めたのは中学3年の時に発生した東日本大震災。家族の苦労を目の当たりにし、「家族を助けたい、再建の道を自分がつなぎたい」――。気仙沼向洋高校情報海洋科で学び、卒業後は静岡県焼津で大型カツオ一本釣船に2年ほど乗船。社会経験を積み志津川に帰ってきた。

「自分のペースで、ふるさとの海で生活の糧を得られることは純粋にうれしい」と勝寛さん。自然相手の仕事ゆえ、思い通りにいかず不安に思うことも多いが、「試行錯誤する経験も楽しい」。そんな時、頼りにするのが父の勝之さんの姿だ。例えば、勝栄丸でのメカジキ突棒漁。銛の突き方、狙いやすい操船技術など父の豊富な経験を肌で感じる。「毎日が勉強。1日でも長く、多くのことを父から吸収したい」と、親子船での学びに感謝する。

一方で、新たな挑戦にも積極的に取り組む。遊漁船業の資格を取得し、船長として週末や養殖業の合間に釣り客を案内、収入に結びつけている。釣果も良く、釣り客からも腕利きの船長として信頼を得ている。幼少期から釣りが好きだったことが遊漁船業に取り組むきっかけだが、「海洋環境が変化する中、生活の安定を築ける仕事を見つけられたら」と挑戦を回顧する。

遊漁船業が本業にもたらす効果もある。客が釣る魚から魚種の変化や海域の特長を把握、「それなら漁業でもこの魚を狙ったらどうだろう」と常に思考をつなげる。家業では今年からタチウオの引縄漁を始めたが、遊漁船での釣果が増えていることがヒントのひとつになった。

「自分が父の背中を見てきたように、今度は海で働く自分の姿を息子に見せたい」と勝寛さん。28歳の時に結婚、第一子の勝真（しょうま）君を授かった。新たに導入した2・5㌧船は「第二十八勝栄丸」と名付けた。

「自分も父親になり、努力して試行錯誤して、いかに効率よく地元の海から収入を得ていくかを考えるようになった」と、まっすぐな視線を海に向ける。

湾内の水質調査や藻場再生の活動、地元の小学生にワカメの体験授業を行うなど、支所青年部の活動にも積極的に参加する。海洋環境の変化など水産業は厳しい状況が続くが、「今後、再び元気を取り戻した時、海や浜の魅力的ななりわいを子どもたちに残していきたい」と笑顔を見せる。

# 過去10年で最高額

## 乾のり　今季入札スタート

県産乾（ほし）ノリ「みちのく寒流のり」の今季入札会が、昨年11月27日から塩釜総合支所で始まっている。初入札の出荷枚数は前年同日比10％増の1841万枚。1枚当たりの平均価格は同6％高27円67銭で、初日としては過去10年で最高値となった。関係者らによると世界的な和食ブームを受け、おにぎりやのり巻きなど引き合いは増加傾向。一大産地の九州で昨季まで不漁が続いたこともあり、本県産への注目度は高いという。

塩釜総合支所での今季初入札会（昨年11月27日）

本所のり部会の内海洋倫副部会長は、「夏場の高水温で苦労した部分はあるが各浜の生産者が努力し、まとまった数量の初入札となった」と笑顔を見せ、「味や香りの良い〝みちのく寒流のり〟を消費者に楽しんでほしい」とアピールした。

当組合の前年度の共販実績は約3億4323万枚。今季は4億枚の生産目標を掲げる。入札会は5月まで計13回の予定で、12月末までに4回を終え出荷枚数は前年同期比27％増の約6520万枚、販売総額は同24％増の約17億9665万円。1枚当たりの平均価格は同3％安の27円55銭。

# 県産への期待高く

## 鮮カキ　生産目標達成へ好発進

当組合は昨年10月27日、今季の生食用むき身カキの出荷を開始した。高水温による成育の遅れを考慮し県の指針（9月29日）より1カ月ほど遅い出荷となったが、本所かき部会の阿部輝喜部会長は「県内外に自信を持って出せるカキになり、ほっとしている。いいスタートを切れた」と安どする。初入札では前年同日比29％増の6・6㌧が上場。10㌔当たりの平均価格は1416円安い4万960円だった。県内の生産実績は2023年度854㌧、24年度725㌧。25年度は生産者数330人で、前年度より約100㌧多い830㌧の生産を目標に掲げている。

10月30日には、当組合と㈱仙台水産、仙台あおば青果㈱が共催し、仙台中央卸売市場で関係者らに県産カキの販売促進を呼びかけるPRイベントを開催。駆け付けた報道陣を通じ、消費者へ旬の到来を周知した。あいさつに立った当組合の立花洋之常務は「生産者はおいしい宮城のカキを届けようと頑張っている。皆さんに味わってもらいたい」とアピールした。

生食用むき身カキの出荷作業（石巻湾支所、昨年10月27日）

# 好漁願い稚魚沖出し

## ギンザケ　昨年より9日早く

県産ギンザケ養殖は、好漁を願い各地で稚魚の沖出し作業が進んだ。

志津川支所戸倉地区では昨季より9日早い11月20日から作業をスタートした。海水温は13、14度台。昨季は高水温の影響を受け、例年より約1カ月遅い12月2日の開始だった。

稚魚は養魚場から1尾150㌘前後で搬入され、合計120㌧（約80万尾）を海面いけすに投入。同地で生産に当たる本所ぎんざけ部会の佐藤正浩部会長は「稚魚は元気で良好」と話す一方、「例年のことながら、海水温や海況を見ながら試行錯誤していかなければ」と気を引き締める。

卵から成魚まで徹底した品質管理の下で生産される県産養殖ギンザケはすっきりとした脂のうまみが特長。当組合の〝伊達のぎん〟や活締めの〝みやぎサーモン〟など、県産のブランド認知は年々拡大している。

同地区では今季、1500㌧の生産を目標に掲げる。佐藤部会長は「生産量を含め、より一層おいしい高品質なギンザケを提供するため、県内の生産者みんなで頑張りたい」と意気込んでいる。

搬入された稚魚を海面いけすに運ぶ志津川支所・戸倉出張所の組合員ら

# 本所リーダー奮闘中

## 組織と職員を下支え

総務部
二瓶　健部長
（51）

「総務課」「経理課」「人事課」「情報システム課」からなる総務部。職場環境づくりから資金管理まで多様な業務で組合運営を下支えする。組合員と接する機会は少ないが、部の職員16人をけん引する二瓶健部長は「何事もなく安定して仕事をこなすことが総務の役割」と〝凡事徹底〟を心がけている。

総務課の大きな仕事の一つは、通常総代会など総会の準備と運営。議案や資料を取りまとめ、招集案内の発送を行うなど多くの仕事を担う。毎月の理事会開催にも携わる。組合員からの出資金の管理も重要な業務だ。そのほか、▽定款、規約の改廃に係る手続き▽役職員表彰対応▽備品消耗品の管理発注――など庶務作業は多岐にわたる。

経理課は確実な決算処理、資金管理を徹底して行っている。各支所の事業計画を取りまとめ県漁協としての収支計画も策定するほか、購買品の支払い、販売品の精算、経費処理など全支所分の日々の入出金を確認しながら預金残高を管理する。水揚げした水産物の代金決済など組合員とも密接に関わっている。

情報システム課は作業用パソコンのセキュリティー対策、各種入札システムの管理などに当たる。合併以来、システム化を進めることで作業の効率化、職員の負担軽減につなげてきた。人事課は職員の採用・異動、給与計算、労務管理を担う。

一方で「職員が安心して、しっかりと仕事に向き合える職場づくりも総務の役割」と力を込め、「そうすれば職員は組合員さんのために仕事に集中できる。結果として浜の活気醸成につながる」と続ける。

その一環として、昨年度は基本給のベースアップに情熱を持って取り組んだ。さらに、定年制度に関する法改正を受けた職員の定年年齢延長（65歳まで）も視野に入れる。「福利厚生を含め、職員のために良いと思うことは何でもやりたい」と意気込む。

さまざまな部署で活躍できる人材の育成にも注力する。人事異動も含め定期的な人材交流、各位別の研修など今後も取り組んでいく構えだ。特に異動に関して二瓶部長は「後ろ向きな理由はなく全て職員の将来のため。新たな学びを得て成長し、いろんな組合員さんと交流し育てていただくことで、さらに成長できる。その循環が浜の活気につながっていけば」と力を込める。

二瓶部長は2008年に入組。大学卒業後に就いた一般企業の営業職からの転職だった。自身も新たな学びと過去の経験が生む相乗効果を感じながら、経理や人事など管理業務畑を歩き23年から現職に着任。震災時には復興対策室でがれき処理を担当、組合員と共に復興に取り組んだ日々を今も鮮明に覚えている。

## 漁家経営維持に全力

経済事業部
髙橋一実部長
（51）

「販売課」「購買課」そして「流通推進課」を擁する経済事業部。髙橋一実部長が統括する。

販売課では共販（共同販売）と衛生対策関連の大きく二つの業務を行う。衛生対策では生産者の負担軽減につながる体制づくりを模索、その一つとして貝毒やカキ養殖のノロウイルス検査での生産者の費用負担軽減を県に求めている。髙橋部長は「物価高騰で検査費用は上昇。安全、安心への対応はもちろんだが、検査費用で収入が圧迫され事業継続が困難になっては本末転倒」と話す。

共販事業では各総合支所と連携し、平等性、合理性を意識した調整を心がける。ノリについては「全国的な減産や物価高により販売価格が高騰中で、県産ブランド『みちのく寒流のり』の品質を重視し、いかにして生産量を維持していくかに注力したい」と意気込む。ワカメなど海藻類養殖では「食用としてはもちろん、地球温暖化を防ぐ切り札としても世界的に注目されている。安定して生産できるように関係機関と連携し、環境変化に対応する種苗の研究に努めたい」と力を込める。

ホタテ・ホヤもALPS処理水による風評被害やへい死、種苗の高騰など近年は厳しい漁家経営となっているが、「現在の窮状を乗り越え、なりわい継続のためにできることは何でも試したい」と強調する。

購買課では、組合員が使う資材や種苗の一括購入の取り組みを「さらに充実させていきたい」と話す。ギンザケの種苗生産、販売も担当するが、魚粉など輸入原料が含まれるギンザケの飼料は円安で価格が高騰しており、髙橋部長は「価格の大きな割合を占める魚粉を代替原料で賄えないか飼料会社と研究を行っている。実現すればコスト圧縮が可能」と取り組む。

流通推進課では水産物や加工品を買い取り、量販店などへ販売している。プライベートブランド商品の開発・販売も手がけるが、髙橋部長は「まだまだ伸び代はある。特に輸出事業を見据え、サンプルを商社に持ち込むなど実現に向け動いている」と話す。ベトナムではギンザケのGI認証を受けるなど着々と歩みを進め、「消費者への販売促進と同様に、企業間取引も拡大したい」と今後を展望する。

高校卒業後、当時の志津川漁協（現支所）でキャリアをスタートさせた。東日本大震災では復興の助成申請作業に従事、「自分の仕事が1日遅れれば組合員さんの復興が1日遅れるとの思いだった」と当時を回顧する。本所に異動後は復興対策室班長、経済事業部次長などを歴任、東京電力への損害賠償請求にも取り組んできた。22年より現職。「真の復興は船や施設の整備のほか、漁業のなりわいの継続が大事」と心に刻む。